

「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育に おける「文型」の位置づけ

蒲 谷 宏

はじめに

本稿は、「〈言語＝行為〉観」、すなわち「言語」とは、「音声」あるいは「文字」を「媒材」とした、「主体」の「表現行為」または「理解行為」そのものである」という「言語観」に基づく「日本語教育」において、「文型」というものがどのように位置づけられるのかを考察したものである。

いわゆる「文型」は、日本語教育、特にその初級段階における教育において、重要な指導・学習項目となっている。しかし、「文型」とは何であるのかという「文型」の本質に関わる規定は、必ずしも明確になっているわけではない。

これまでにも「文型」とは何かを明らかにするための調査・考察を試みたが¹⁾、本稿においては、「文型」の本質を考えていくための一段階として、筆者の考える日本語教育における「文型」の位置づけを提示しておきたいと思う。

1 「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育

1.1 「〈言語＝行為〉観」

1) 「「文型」をめぐる問題点」『講座日本語教育』第30分冊(1995)、「「文型」とは何か——日本語教育における「文型」の位置づけ——」『講座日本語教育』第31分冊(1996)

「〈言語＝行為〉観」というのは、〈「言語」とは、「音声」あるいは「文字」を「媒材」とした、「主体」の「表現行為」または「理解行為」である〉と規定する「言語観」のことである²⁾。

①「音声」を用いた「表現行為」、すなわち「話す」という行為は、基本的に次のような一連の行為によって成り立つ。

「話し手(「表現主体」)」が
「話したいこと(「表現意図」)」を実現するために、
「場」(「文脈」「状況」「雰囲気」)や「人間関係」(「自分」「相手」「話題の人物」相互の関係)を認識し、
「話しことばであること(「表現形態」)」を考慮しつつ、
「何について話すか(「題材」)」「何を話すか(「内容」)」を選択し、
適当な「コトバ」(「言材」)によって、一まとまりの「談話」(「文話」)を構成し、「音声化」する

②「音声」による「理解行為」、すなわち「聞く」という行為は、基本的に次のような一連の行為によって成り立つ。

「聞き手(「理解主体」)」が
「聞きたいという気持ち(「理解意図」)」を持ち、
「場」(「文脈」「状況」「雰囲気」)や「人間関係」(「自分」「相手」「話題の人物」相互の関係)を認識し、
「話しことばであること(「表現形態」)」を考慮しつつ、
「談話」(「文話」)の展開に即して、「音声」に「コトバ」(「言材」)を適合させ、
「何について話されているか(「題材」)」「何が話されているか(「内容」)」

2) 以下の記述について詳しくは、拙稿「「言語＝行為観」における「行為」について」『国語学研究と資料』17(1993)・同「「〈言語＝行為〉観」に基づく「言語教育」について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』7(1995)を参照されたい。

を把握し、

「相手」の「表現意図」を理解する

③「文字」を用いた「表現行為」、すなわち「書く」という行為は、基本的に次のような一連の行為によって成り立つ。

「書き手(「表現主体」)」が

「書きたいこと(「表現意図」)」を実現するために、

「場」「文脈」「状況」「雰囲気」や「人間関係」「自分」「相手」「話題の人物」相互の関係を認識し、

「書きことばであること(「表現形態」)」を考慮しつつ、

「何について書くか(「題材」)」「何を書くか(「内容」)」を選択し、

適当な「コトバ(「言材」)」によって、一まとまりの「文章」「文話」を構成し、「文字化」する

④「文字」による「理解行為」、すなわち「読む」という行為は、基本的に次のような一連の行為によって成り立つ。

「読み手(「理解主体」)」が

「読みたいという気持ち(「理解意図」)」を持ち、

「場」「文脈」「状況」「雰囲気」や「人間関係」「自分」「相手」「話題の人物」相互の関係を認識し、

「書きことばであること(「表現形態」)」を考慮しつつ、

「文章」「文話」の展開に即して、「文字」に「コトバ(「言材」)」を適合させ、

「何について書かれているか(「題材」)」「何が書かれているか(「内容」)」を把握し、

「相手」の「表現意図」を理解する

「〈言語＝行為〉観」においては、「言語」と規定されるものはあくまで

もこれら一連の「行為」だけであって、こうした「行為」を離れたところに「言語」の存在を認めるものではない。したがって、同じく「言語行為」といっても〈「言語」を用いた「行為」〉という考え方とは、根本的に異なるものである。

また、「〈言語＝行為〉観」において重視されるのは、こうした一連の「行為」全体であって、その部分的な行為ではない。部分的な行為はあくまでも「表現行為」・「理解行為」全体の中において意味をもつものである。「表現行為」・「理解行為」の全体を重視するということは、要するに「言語」とはすなわち「音声・文字による伝達行為」と捉えることなのである。

1.2 「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育

こうした「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育というのは、日本語を母語としない学習者に、日本語の「表現行為」・「理解行為」、すなわち日本語による「伝達行為」を習得させるための教育ということになる。

日本語による「表現行為」・「理解行為」の「主体」は、あくまでも「学習者」である。上述の「話す・聞く・書く・読む」という四形態の「行為」を行うのは「学習者」自身であり、「学習者」が文字どおり主体的にそれらの行為を行わないかぎり、「日本語学習」は成立しないし、当然、日本語の「習得」もあり得ないのである。

したがって、「教師」の役割は、「学習者」自身が日本語の「表現主体（「話し手」・「書き手」）」として、あるいは「理解主体（「聞き手」・「読み手」）」として、日本語の「表現行為（「話す」・「書く」）」あるいは「理解行為（「聞く」・「読む」）」を的確に行えるような指導・援助をすることになるわけである。

先に「行為」の全体が重要であると述べたとおり、1.1の①から④において示したそれぞれの一連の行為はすべてが大切な行為ではある。が、中でも特に重要なのは、学習者に「意図」と「文話」とを的確につなぐこ

とのできる日本語能力を習得させることである。これは、つまり、〈「表現主体」としての学習者が、「表現意図」を持ち、その「表現意図」を的確に実現するために、適当な「コトバ」（「言材」）によって適切な「文話」を構成することができる〉ようにすること、また、〈「理解主体」としての学習者が、「文話」の展開に即して、「音声」・「文字」に適当な「コトバ」（「言材」）を適合させ、「題材」「内容」を把握した上で、「相手」の「表現意図」が理解できる〉ようにすることである。その際、学習者の「表現行為」・「理解行為」の能力を養成するために必要な知識を与えたり、方法論を示したりすることなどは、意味のある指導となるだろう。

言語教育において「コミュニケーション」を重視するという考え方は、最近ではやや言い古された感もある。しかし、先にも触れたように、「言語」それ自体を扱うことが「コミュニケーション」を考えることに直結している「〈言語＝行為〉観」と、〈「コミュニケーション」とは別に「言語」というもの〉があり、それを使ってコミュニケーションをするという考え方とは、根本的に異なる。そのため、「コミュニケーション重視」といっても、その根底にある捉え方の違いには留意する必要があるだろう。「〈言語＝行為〉観」における日本語教育においては、「話し、聞き」ということだけではなく、「書き、読む」という行為においても、当然「コミュニケーション」ということが重視される。したがって、例えば〈読み書きだけでは、言語は学べてもコミュニケーション能力が高まらない、コミュニケーションを重視するなら、もっと話したり、聞いたりさせなければだめだ〉などという考え方とは、まったく相容れないわけである。

2 「文型」の位置づけ

こうした「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育において、「文型」——「文」の「型」——というものがどのように位置づけられるのかを検討していくことにしたい。

2.1 「文」の位置づけ

まず、「文」の「型」としての「文型」を考えていくための大前提とも言える「文」について見ていくことにする。

「文」というものの内包を厳密に定義することはむずかしいのだが、「〈言語＝行為〉観」における「文」の位置づけという意味での規定をする

と、
規定Ⅰ 〈「文」とは「文話」を構成する基本的な単位である〉
とすることができる。

「文話」は、ある「表現意図」を叶えるための質的統一体、いわば、ある「意図」を持った一まとまりの表現と言えるものであるが、通常、複数の「文」により構成される。例えば、「自己紹介する」という「表現意図」を持つ、「はじめまして。わたしは、王といいます。中国から来ました。どうぞ、よろしくお願いします。」などといった「文話」は、複数の「文」によって構成されているわけである。したがって、「はじめまして。」「わたしは、王といいます。」「中国から来ました。」というそれぞれの「文」は、この自己紹介の「文話」を構成する基本的な単位としての役割を担っていると言えるのである。もちろん、状況によっては、「わたしは、王といいます。」という一つの「文」だけで「自己紹介」という意図を持つ「文話」が構成できることもある。ただし、その場合には「わたしは、王といいます。」という「文」がすなわち「文話」となるわけである。

上の規定とは別に、「文」は基本的にはいくつかの「言材」(「コトバ」)から成り立っているという点から、次のように規定することもできる。

規定Ⅱ 〈「文」とは「言材」によって構成される基本的な単位である〉

例えば「わたしは、王といいます。」という「文」は、「わたし」「は」「王」「と」「いう」「ます」といった「言材」によって構成されているわけである。

先の「文」と「文話」との関係と同様に、例えば「王。」という「文」は、一つの「言材」だけから成り立ってはいるが、それ自体は「言材」で

はなく、あくまでも一つの「文」である。(さらに言えば、「王。」だけで「文話」となる場合もある。)

以上の「文」の二種の規定は、「文」というものの二面性を表すものであるが、「〈言語＝行為〉観」において重要なことは、「文」が「文話」や「言材」と離れて規定できるものではないということ、言い換えれば「文」というものが「表現行為」や「理解行為」の中で独立した位置づけを持つものではないということである³⁾。

2.2 「言語」における「型」

「文型」についての位置づけを述べる前に、「型」というものについて考えておくことにする。「文型」が「文」の「型」と言われる意味もそこに含まれてくると思われるからである。

「型」という言葉の意味として、例えば『広辞苑』には、
「…(普通「型」と書く)個々のものの形を生ずるもととなるもの、または個々の形から抽象されるもの。① 形を作り出すもとになるもの。鋳型・型紙などの類。② 伝統・習慣として決まった形式。③ 武道・芸能・スポーツなどで、規範となる方式。④ ものを類に分けた時、それぞれの特質をよく表した典型。そのような形式・形態。タイプ。パターン。…(用例は省略)」
などがある。

「言語」における「型」を考える際に、ここに示されている「型」の二つの捉え方、すなわち〈個々のものの形を生ずるもととなるもの〉としての「型」と〈個々の形から抽象されるもの〉としての「型」を区別しておくことは重要であると思われる。

3) 「文型」を考えるための大前提ともなる「文」が、「表現行為」・「理解行為」においてそれだけで独立し得る単位ではないという位置づけは、従来の「言語研究」における見解とは大きく異なるものである。この点に関する詳しい検討は今後の課題としておきたい。

なぜなら、「言語」における「型」として、第一に考えられるのは、〈個々の形から抽象されるもの〉という意味での「型」であって、〈個々のものの形を生ずるもととなるもの〉という意味での「型」ではないからである。

つまり、「言語」において考えられる「型」というのは、上述の④の意味での「型」——「典型」あるいは「類型」と言えるもの——であり、①の「鋳型や型紙」のような「型」ではないのである。

ところが、「文型」というものは、特に教育面においては、〈個々の形から抽象されるもの〉としての「型」ではなく、〈個々のものの形を生ずるもととなるもの〉としての「型」として扱われることも多いようである。

「文」の「型」として、まず考えなければならないものは、あくまでも〈個々の形から抽象されるもの〉としての「型」である。そしてそれが「文」の「型」と言えるものであることが確認されてから、〈個々のものの形を生ずるもととなるもの〉という意味での「型」として、学習・教育において役立てられるという順序が守られる必要がある。

「言語」に何らかの基本的な「型」と呼べるものがあるとすれば、教育・学習の第一段階として、そうした基本的な「型」から入っていこうとする考えは、一つの方法論として自然なあり方だと言うことはできる。しかし、どのようなものを「型」として設定するのか、そして、そうした「型」を〈個々のものの形を生ずるもととなるもの〉という意味での「型」として捉え直すことが可能であるのか、また、どのように具体的な教授方法を作りあげていくのか、また、そうした教授方法にどういう意味があるのかなどといったことについての検討を抜きにして、安易に「型」を教育に導入することには問題があるだろう。

2.3 「文」の「型」の位置づけ

以上のことを踏まえ、「文」の「型」というものをどのように位置づけるのかということを考えていくことにする。

2.1において述べた「規定Ⅰ〈「文」とは「文話」を構成する基本的な単位である〉」における「文」は、基本的に、「文話」で表される「表現意図」や「意味・内容」を部分的に担うものとなる。したがって、その「型」というのも、「文」の「形態上の型」としてよりは、広義の「意味上の型」として考えられる。

例えば、「わたしは王といます。」というのは、自己紹介という「意図」を持った「文話」において、自らの姓を名乗るという「名乗り」の部分を担当している「文」と言うことができる。したがって、それを一つの「型」として捉えれば、「名乗りの文型」などということになる。そのように考えると、例えば「〇〇といます。」「わたしは〇〇です。」なども「名乗りの文型」の一種として扱うことができるかもしれない。

こうした「文型」の捉え方は、日本語教育における常識的な意味での「文型」とはやや異なるものであるが、「文」を「文話」を構成する要素だと考えれば、必然的に生じる「文」の「型」の位置づけであると思われる。

それに対して、「規定Ⅱ〈「文」とは「言材」によって構成される基本的な単位である〉」における「文」では、基本的に、どのような「言材」がどのようにして「文」を構成するのかということに焦点が移る。例えば、「わたしは王といます。」であれば、「は」という「言材」の性質や「と」「いう」などの「言材」の性質によって、「——は——という」といった一つの「文型」を抽出することができる。「あの人は山田さんといいます。」も同じ「文型」による「文」であると言えるわけである。

これは、一般的な初級教育などでも馴染みのある「文型」だと言えるだろう。どのような「言材」で、どのようにして「文」を作るか、という点を抜きにしては「表現行為」も成り立たないことからすれば、こうした「文型」は極めて重要なものとなるわけである。

しかし、先にも述べたように、「文」自体は本来独立した単位とは言えない。したがって、「文」を作るという行為は、それ自体が独立し、それ

自体で完結する行為ではなく、その行為の前提として、あるいは目的として〈この「意図」を叶えるためには、どのような「文話」をどのようにして作っていくか〉ということが考えられている必要がある。例えば「中国から来ました。」という「文」は、それ自体で独立した「文話」を構成するのでないかぎり、自己紹介という意図を叶えるためには不十分なのであるから、その「文」を作ることだけで「完結した表現行為」とはならない。「文」を作るという行為は重要ではあるが、それを「表現行為全体」から切り離して、抽象的に扱ってもあまり意味はないのである。どのような「言材」がどのようにして「文」を構成するのかというタイプの「文型」では、「文」を出発点あるいは到達点としている点で、実際の「表現行為」・「理解行為」につながらないのである。規定 II における「文」の「文型」の限界がそこにあると言えよう。

「文」という単位での捉え方は、もちろん重要なものではあるが、実際の表現の多くが「文」だけの単位では成り立っていない以上、「文話」が持つほどの重要性は「文」にはない。「〈言語＝行為〉観」において重要なのは、「意図」と結びついている「文話」の「型」なのであって、その意味では、「文」の「型」は最重要項目と言うことはできない。

しかし、逆に言えば、「文話」の「型」にも関わる「文」の「型」は重要なものになるわけである。先に述べた「名乗りの文型」や、例えば「——のだ」なども「事情説明の文型」として捉えることによって「文話」の構成にとって重要な「文」の「型」になりうると言えよう。

また、こうした「文型」は、「表現行為」だけではなく、「理解行為」においても重要な意味を持つ。ある「文」を「文話」における「文」の「型」として把握することにより、その「文」が「文話」において持つ意味が明らかになり、その結果、「理解行為」の目的とも言える、「相手」の「表現意図」を的確に理解することなどにつながると言えるからである。

ただし、「文話」の構成に関わる「文」の「型」を理解するだけでは、実際の「表現行為」・「理解行為」を的確に行うことはできないだろう。

「人間関係」や「場」、「表現形態」の特色などについての認識なしに、的確な「表現行為」や「理解行為」は成立し得ないのである。

教育面から見て、「文型」は、たしかに重要な指導・学習項目の一つではあるが、「文型」を中心に据えて、「文型」から「表現行為」・「理解行為」の指導・学習に入るのは、「〈言語＝行為〉観」における日本語教育においては、必然性のある指導・学習方法であるとは考えられない。先にも述べたように「〈言語＝行為〉観」における日本語教育において、まず考えなければならない「型」は、「文話」の「型」である。「文」の「型」は、「文話」との関わりにおいて位置づけられたときに、はじめて意味を持ってくると言えるのである。

おわりに

以上、大まかな整理ではあるが、「〈言語＝行為〉観」に基づく日本語教育における「文型」の位置づけを試みた。

これまでも指摘されてきた、「文型」の持つ重要性和「文型」だけに囚われてしまうことの危険性という両面性は、文型が「文」の型であるという点から必然的に生じることである。特に、「文」が「文話」とは切り離されたところで扱われる場合には、「文型」の持つ問題点が顕著になると言えるだろう。

「文型」というものが担う新たな役割は、「文」を「文話」の中に位置づけることにより生み出されるかもしれない。これは、従来の「表現文型」などという捉え方と共通するところもあるかと思われるが、そのことに関する具体的な考察、検討は今後の課題としておきたい。